

9月のおはなし

「櫳の伝言」

蝉時雨が遠い思い出になり、
草むらからは虫の音が聞こえ
る。足に残ったビーチサンダル
の鼻緒の日焼け跡は随分目立た
なくなつた。季節は夏から秋へ
確実にシフトしているのだ。

ス

イミングスクールに娘を
迎えに行く道すがら、誰
もいないはずの右側からコツコ
ツとアスファルトを小さくノツ
クする音がした。そこにはドン
グリが二つ、ころんと転がって
いた。

見上げると、樫の木が大きな



屋敷から張り出していて、そ
こから落ちたらしい。こんな大
きな木があつたことに今まで
ちつとも気がつかなかった。
しかし、ドングリなんて何年
ぶりだろう。昔は随分拾って遊
んだ気がするが、そんな記憶は

一昨日の夢の残像のようで掴み
所がない。幼い日の思い出は、
夏の日焼けのようにその時は強
烈な痕を残しても、やがて消
えてどこがそれだか分からなく
なつてしまう。結局、人生とは
忘却の過程なのだ。誰の言葉だ

ろう。まあ誰でも言いそうなこ
とだ。

プ

ールを見下ろす待合室で
娘を探した。視線は自然
と茶色のスイミングキャップに
吸い寄せられた。まるでドン
グ
リだ。

泳ぎ終えた彼女がこちらに気
がつき、僕は手を振つた。しか
し彼女は特に応えず、ロッカー
ルームにすたすた歩いて行っ
た。

「手を振つたのに」





彼女は軽く眉をあげた。

「愛情が足りないからじゃないか？」

「そんなことはないさ」

しかし最近の小学五年生はどこでこんな仕種や言葉を覚えるんだらう。

「じゃあ今年のパレンタインに私が父さんにどんなチョコあげたか覚えてる？」

「覚えてない」

「ほら」

ロッカールームから出た彼女にそう声をかけた。
「私も振ったよ」
彼女は面倒くさそうに続けた。

「心の中でね。見えなかった？」
「君の見事な水掻き程にはね」



ンバーガーシヨップに入り、彼女は水泳で消

費した以上のカロリーがあるハンバーガーを食べた。勿論僕が払った。皆そうやって櫛の木みたいに成長していくのだ。

「ねえ、来る途中でドングリを見つけたんだ。すごくない？」



はポケットからドングリを取り出してテーブルに置いた。

「そのへんにいくらでも落ちてるんじゃない。大人には見えないの？」

そう、僕もそれを考えていた。

「大人になるとドングリの言葉を忘れて、ドングリの声が聞こ

えなくなるんだよ、多分。君が乳児の言葉を忘れたように」

「ふうん」

「これ、すぐ横に落ちたんだ。何かのメッセージみたいに。言葉を忘れた僕には分からないけど、君の耳なら何か聞こえるか



も」

彼女は少しドングリを見てから僕を見た。

「父さんは充分子供っぽいと思う。分からないのは言葉を忘れたからじゃなくて、メッセージなんてないからじゃない？」

「何をもらったんだっけ。思い出せないよ」

ああ、そのこと、と彼女は小さく笑った。

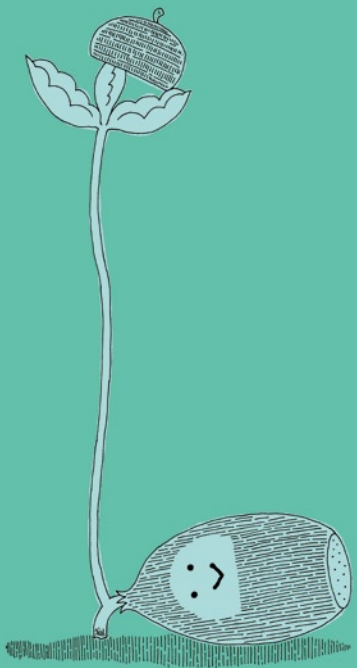
「あげてないよ。あげるの忘れてたの」 ■

そ

それから僕はしばらく考えた。メッセージについてではなくて、彼女から二月に貰ったものについて。急に黙った僕を見兼ねて彼女が声をかけた。

「どうしたの」

5



妄想の地平線

9月のおはなし

文 ハヤシアキオ 絵 凹工房

本書の無断複写・複製・転載を禁
じます。

© HAYASI AKIO & BOKOKOUBOU